

昼飯大塚古墳の概要

昼飯大塚古墳は全長約 150 mにおよぶ岐阜県最大の前方後円墳です。後円部の直径は 96 m、高さ 13 m、前方部の高さ 9.5 mとなる3段築成です。周囲には深い周壕がめぐり、墳丘には葺石が葺かれ、埴輪は3重に並べられていました。埴輪には円筒埴輪のほか、朝顔形埴輪や楕円筒埴輪がみつっていますが、後円部頂上には家・鞍・盾・蓋・甲冑形埴輪などの形象埴輪も置かれていたようです。

古墳の中心人物が眠る竪穴式石室(北棺)は盗掘されていますが、ほかの粘土槨(南棺)と木棺直葬(西棺)は当時のままです。南棺は未調査ですが、西棺には多数の鉄刀や鉄剣、農工具が棺外に副葬されていました。このように昼飯大塚古墳には同じ墓域に3人が眠る古墳で、埋葬は当初から計画的に行われていたようです。

埋葬の際には、後円部頂上で多量の玉類(勾玉・管玉・霰玉・白玉・算盤玉・ガラス玉)や笄形土器、土製品、土器などが使われたようで、葬送の様子もわかりました。

このように約 1600 年前に築かれた昼飯大塚古墳は、墳丘規模、埴輪や様々な出土品にみる葬送の実態、竪穴式石室や粘土槨などの埋葬施設の点において、東海地方の古墳時代の政治・社会を考える上で重要な古墳と言えます。



昼飯大塚古墳と不破古墳群



昼飯大塚古墳がある一帯は通称「青野原」と呼ばれ、大垣西部から垂井町にかけては多くの古墳が確認されています。このうち前方後円(方)墳などは、その地域を治めた人物(首長)の墓(首長墓)と考えられるため、その墳形や規模は地域の政治的動向を考える上で参考になります。

昼飯大塚古墳周辺には矢道長塚古墳や粉糠山古墳をはじめ親ヶ谷古墳(垂井町)などの重要な前方後円(方)墳が現存します。これらの古墳群を「不破古墳群」として理解し、地域に残る貴重な歴史的資産として大切に保護し、後世へ伝えることが大切です。

(「国指定史跡 昼飯大塚古墳 パンフレット」より)

国指定史跡

昼飯大塚古墳

現地説明会資料
平成21年8月22日(土)

～いま甦る。
いにしへの青野原～



キーワード

前方後円墳(ぜんぼうこうえんふん)

3世紀中頃から6世紀後半に作られたお墓の一つ。円形の墳丘の一端に方形の墳丘を接続させた形をしている。方形を「前方部」、円丘を「後円部」、方丘と円丘が接する所を「くびれ部」という。遺骸は一般に後円部に埋葬され、前方部は祭壇の意義をもつとされている。墳丘には埴輪をめぐらせ、斜面は石で覆った。「畿内」を中心に広まり、ヤマト政権と地方を考える重要な遺跡でもある。前方後円墳という名称は、江戸時代に古墳研究を行った蒲生君平が『山陵志』という本で「前方後円」と形容したのが始まり。これは古代中国の宮車を横から見たところを、土を盛って模倣したと考え、車の進行方向にしたがって前・後の区別をした。北は岩手、南は鹿児島まで広がり、全国におよそ5200基ある。

葺石(ふきいし)

古墳の盛土の上に葺く石、または石が覆っている状態などをいう。採取地の条件によって、礫の大きさや質が異なる。葺石の目的は土砂の流失を防ぐためとか、外観を美しくする目的もあったとも言われている。

昼飯大塚古墳の葺石は、砂岩が最も多く、チャートや頁岩は少量である。その多くは大谷川周辺より運搬されたと考えられている。

円筒埴輪(えんとうはにわ)

素焼の焼き物で、古墳の表面に列をなして並べ飾られた。丸い筒の形をし、表面には突帯(「たが」とも)が2条～数条めぐらされている。この突帯の間に円形または、半円形・長方形・方形・三角形などの透かし孔が2～4個あいている。墓域を表すのに使用されたと考えられている。他に、家や器財(盾などの道具)・人・動物などを模した形象埴輪もある。

昼飯大塚古墳ではこの円筒埴輪が最も多く並べられ、表面が赤く彩色されていた。復元できた高さは約60～70cmで、長方形の透かし孔がみられる。後円部や前方部の頂上をはじめ墳丘のテラスにも並べられた。

針貫入試験(はりかんにゅうしけん)

直径約0.6mm、長さ10mmの針を測定対象に押し当て、針の入った量と入る時にかかる力を測定して、「針貫入勾配(N/mm)」で表現する。硬い試料ほど値は大きくなり、柔らかい試料ほど値は小さくなる。

一般的には土木工事の土質検査に使用されているが、昼飯大塚古墳では墳丘土の強度を測定するためにいった。

メモ

発行:大垣市教育委員会 文化振興課
〒503-0888 岐阜県大垣市丸の内2丁目55番地
Tel: 0584-81-4111(代表) Fax: 0584-81-0715
編集:株式会社イビソク (整備支援)